

宮古のサシバ文化

Culture on Gray-faced Buzzard in the Miyako Islands, Okinawa, Japan

アジア猛禽類ネットワーク、宮古野鳥の会

久貝 勝盛

Katsumori Kugai

Abstract

Since olden times, people of the Miyako Islands, widely known as the roosting place of the Gray-faced Buzzard have been very excited during the autumnal migratory season. Although today the Gray-faced Buzzard is a protected species, these islands have a long history of catching the birds. When schools had athletic meetings during the autumnal migratory season, the local people often protested to the schools because the sound of bells, drums and voices scared the birds and meant that they couldn't catch them.

The local people of the Miyako Islands have developed a unique method for catching the birds. They built a special catching house (hunting blind) called a "Tsugya" in the local language.

In the days when the Gray-faced Buzzard were not caught, people would sat in a circle and have beauty contests with the birds. A person who caught a very beautiful male bird to use a decoy bird, or who made a catching house, "Tsugya" (hunting blind) in a good location was envied by everyone. They were proud of the large number of birds they caught and talked with each other about the best way to cook them. When cooked them, they generally made a stew, a soup with them or out them into the boiled water and plucked the feathers and fried them with their own fat. The stew was called "Taka Jyushi" in an miyakoan dialect. "Taka Jyushi" means a stew made of Gray-faced Buzzard. Children made rings with the sharp claws of the birds and feathers were used brooms.

The migratory season of the birds brought it a good chance for the people to communicate with each other. They would gather together and tell various stories about the birds, every night after catching them. At that time, the Gray-faced Buzzard were given to all of the children as their pets. Children competed with each other to see whose bird could fly the further distance. They tied a string which was attached to a wooden clog around both legs and then released the birds, holding on to the wooden clog, for race.

I have called them "Culture on Gray-faced Buzzard" in the Miyako Islands, Okinawa, Japan.

Key words: Culture on Gray-faced Buzzard, Gray-faced Buzzard, catching house, Tsugya, hunting blind, Taka Jyushi,

はじめに

琉球でサシバが初めて記録されたのは中山伝信録（徐葆光、1721）で科学的に記録されたのは石垣島気候編（岩崎卓爾、1974）である。

サシバとは青森県以南に夏鳥（春に繁殖のため日本に渡り秋に日本を去る鳥）として渡来し低山や丘陵地帯で繁殖する（三上、2015）。伊良部島に大群で立ち寄るのは秋の渡りの時である。国外では中国東北部と朝鮮半島北部で繁殖する。

かつて、宮古の住民は身近な動植物を生活の中に取り入れ自分たちの生活リズムを整えてきた。とりわけ、サシバと地域住民の結び付きは強力で世界的にも類を見ない独特なサシバ文化を形成した。

1 宮古の住民とサシバ

昔からサシバの休息地として知られる宮古ではサシバのシーズンになると今でも島中が色めく。現在は行政や関係者の地道な努力によってサシバ密猟は無くなったが、その密猟の歴史は大変に古くて長い。

かつては、サシバのシーズン中に学校が運動会を行うと、太鼓やベルの音、人の声でサシバが捕れなくなるということで地域住民から学校に抗議があったという。いかに、島全体がそのシーズン中緊張していたかが分かる。

その昔（1960年代）、サシバのシーズン中（10月10日前後二週間）は島中が燃えた。大人も子供も血が騒いだ。皆こぞってサシバ捕獲に繰り出した。サシバ捕獲は島人達の年に一度の楽しいハンティングだった。捕獲されたサシバは食料や子供達のペットになった。市場にも売りに出され貴重な換金動物にもなった。サシバが保護鳥に指定される以前は日常茶飯事にサシバ捕獲がなされていたのである。

1972年に沖縄は日本に復帰し本土の鳥獣保護法が適用された。サシバも保護鳥に指定された。しかし、昔からサシバが地域住民の生活の一部になっていたという背景等もありサシバ保護思想を浸透させるのは至難の業だった。依然としてサシバ密猟は後を絶たななかつた。

2 世界に類を見ないサシバ捕獲方法

サシバと関わった長い歴史の中で、住民は世界中、どこにもないような宮古独特のサシバ捕獲方法を考案した。それは伊良部島でツギヤ（tsugya）、来間島でスギヤ（sugya）とよば

れる捕獲小屋の利用である。伊良部島のツギヤと来間島のスギヤの造りはほとんど同じである。

1) 伊良部島のツギヤ

伊良部島国仲のある古老（1970年代70歳、故人）はツギヤについて以下のように話してくれた。

まず、リュウキュウマツの枝やツルクサ（方言名：キャーム、和名：シイノキカズラ）、ススキ等を使用してサシバがよく休息しそうなモクマオウやリュウキュウマツ（地元の古老たちは長年の経験から、どの木に一番、多く止まるのかということはよく知っていた）の真ん中よりやや上の方に人間が二人程入れるような小屋を造る。その小屋から約1,5メートル上にサシバの止まり木を2~3本セットし、すでに捕らえられているサシバをオトリにして捕獲した。オトリは下から二段目の止まり木に置いた。

オトリには地元の古老たちが赤目（方言：アカミー）と呼んでいるもので目の色が、赤みがかった黄色、羽の色も全体的に赤みの強い褐色の雄、成鳥を使用した。これ以外はあまり利用しなかったという。また、住民はサシバを目の色で以下の4種類に分け、その目の色で味の優劣や売買する値段を決めた。アカミー（赤みがかった黄色、オス成鳥）、キンミー（黄色の目、メス成鳥）、タリカスミーまたはムタミー（薄い黄土色の目、メス幼鳥）、オオーミーまたはフッフミー（薄い青っぽい目、オス幼鳥）の4種類である。その他、カラパイアカミー（灰色っぽい赤目）という呼び方もある。下地地区与那覇では、暗色型サシバ、オス成鳥の目をガラサアカミー（体色がカラスのように黒く目が赤っぽい）と呼ぶ人もいた。おいしさでは幼鳥タイプとメス成鳥タイプが美味で値段も高く売れたという。



写真1 オオーミーまたはフッフミー（オス幼鳥）
（1980年代、伊良部で保護）



写真2 アカミー（オス成鳥）
（1980年代、伊良部で保護）



写真3 タリカスミーまたはムタミー
(メス幼鳥) (1980年代、伊良部で保護)



写真4 キンミー (メス成鳥)
(1980年代、伊良部で保護)

オトリは両翼の下から背中にかけてしばられ、そのヒモは止まり木の下にある捕獲小屋(ツギヤ)まで届いた。また、オトリには背中から二本のヒモがつけられ一本は止まり木の最上段の止まり木にもう一本は一番下の止まり棒に括(くく)り付けられた。



写真5 典型的なツギヤ
(1980年代、伊良部)



写真6 オトリのサシバ
(1980年代、伊良部で保護)
アカミー (赤目)



写真7 オトリのサシバ
(1980年代、伊良部で保護)

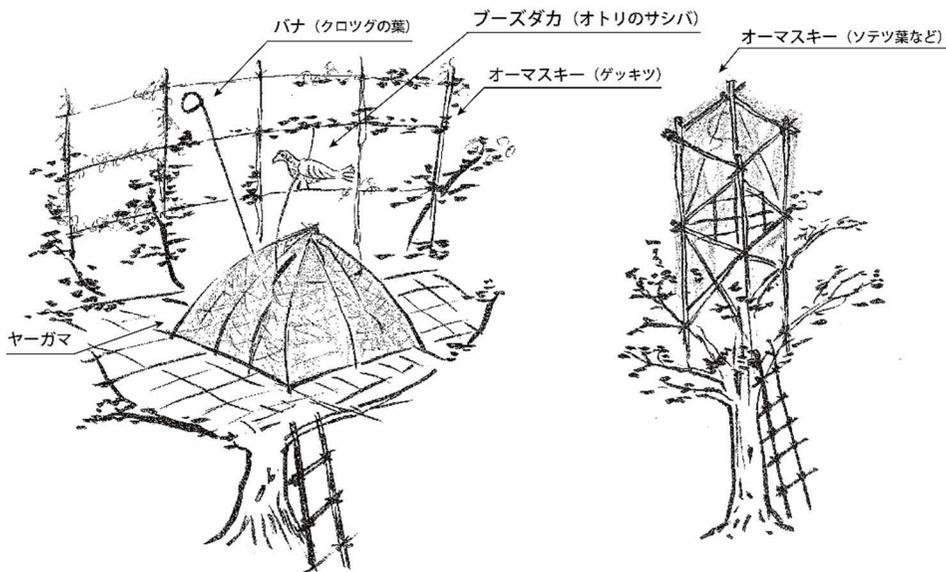


写真8 捕獲直後のサシバ
(1980年代、伊良部で保護)

2) 来間島のスギヤ

来間島在住の国仲富美男氏（昭和26年生）は以下のように話してくれた（2018.8.1）。
サシバ捕獲方法には三つのタイプがあった。

一つはサシバ飛来時の昼間に利用するスギヤ、二つ目は夜間に利用する地元の人たちがンドゥズギーと呼ぶスギヤ。もう一つは地元の人たちがイジャズと呼ぶ単独で夜間、懐中電灯と捕獲用のワッカのついた竿で捕らえる方法である（図1，2）。



スギヤ（昼間用）

図1

ンドゥズギー（夜間用）

図2

国仲富美男氏スケッチ（2018.8.1）



写真9 イジャズ（ワッカを取り付けた竿と懐中電灯でサシバを捕獲、単独行動）
（ワッカ作製：国仲富美男氏、2016.12）



写真10 ツギヤと捕獲用竿（バナダキ）
（1980年代、伊良部）

来間島の昼間用のスギヤは島の北西側、崖下にあるモクマオウやリュウキュウマツを利用して造られた。スギヤは地元の人たちがバナカジ（崖とスギヤの間を通り抜ける風）の吹き抜ける場所が最も良いとされた。部落有地内にある樹木は寒露前に入札に付された。落札した人は自分の屋号（例えばプカーテイギー：プカーテイ屋の木）の印を入れた。入札で落ちたお金は島の部落行事、敬老会、祭りごと等に使われた。

スギヤは地上から約4メートルの所に捕獲小屋（来間島方言名：ヤーガマ）を造る。さらに約1.5～2メートル上に止まり木を3本置く。一番下の止まり木には捕獲したオトリのサシバ（方言名：アカミー）を置いた。オトリのサシバには背中から2本のヒモがつけられ1本は2段目の止まり木にくくりつけられもう1本は捕獲小屋まで届いた。

宮古諸島に飛来するサシバの群れは早いもので午前11時30分頃から見られる。一番多く見られるのは午後2時から夕方6時頃にかけてである。

サシバの群れが捕獲小屋（ツギヤ、スギヤ）の上空近くに接近すると小屋に入っている人がオトリのサシバにつけたヒモを引っ張って羽をバタバタさせる。近くを飛行中サシバがそれに気づきオトリの止まり木近くに次々と舞い降りる。サシバが止まり木に止まると、小屋中の人が竹竿の先に取り付けたワッカ（クロツグという植物の繊維を利用）をサシバの首に引っ掛けて捕えた。

高度800～1,000メートルを飛行しているサシバが、オトリのサシバを目がけて弾丸のように飛び込んでくる様は実に見事である。翼を三角形にすぼめ、空にN字状の文字を書くように舞い降りる。小屋の中にいると、ヒューツ、ヒューツという風を切る翼の音も聞こえたという。また、オトリの近くの止まり木に降り立ったサシバが息をハァーハァー弾ませる音も聞こえたという。飛行中は、だいぶエネルギーを消耗するのだろう。それにしても約1,000

メートルもの空中から翼をバタつかせるオトリのサシバをすぐに見つける視力の鋭さにはビックリさせられる。

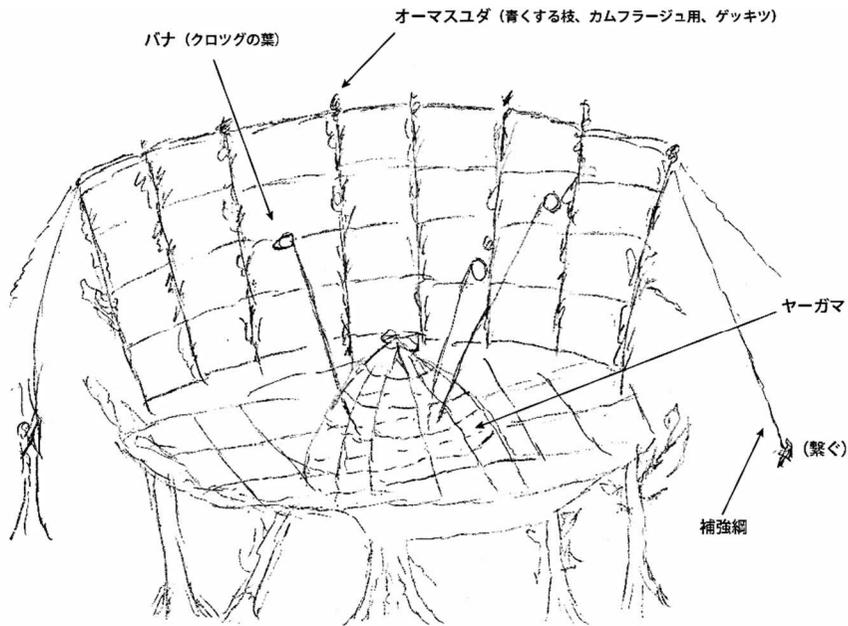


図3 下地地区(スギヤ)幸地昇良氏スケッチ

しかし、なぜ、オトリに使用するサシバが全体的に赤みの強い成鳥、雄でなければならないのだろうか。このことについてはまだ詳しいことはわかっていない。

夜間用のスギヤでは人間が一人入り、何かのハプニングで飛んできて止まるサシバを素手で捕らえた。時々、サシバの鋭い爪でケガした人も出たという。



イジャズと呼ばれる捕獲方法は夜、懐中電灯でサシバの目を照らし捕獲用の先端にワッカ(方言名:バナ)の付いた竿で捕らえた。サシバは目に光を当てられるとすくんでしまって動かなくなる。ほぼ一晩中サシバを探し回っても、せいぜい2~3羽しか捕れなかったようだ。

それではシーズン中(寒露の2週間前後)、ツギヤを利用して、どのくらいのサシバが捕獲されたのだろうか。かつ

写真11 サシバを素手で捕らえる(1957年代、パイナガマ付近)(琉球新報社提供)

て、サシバ捕獲のプロフェッショナルとよばれた古老は一つのツギヤで大体、100～150羽は捕れたと話してくれた。中には、一日で138羽も捕ったという人もいたという。

戦前は宮古諸島全体で約1,500～2,000個ものツギヤが作られた（故友利恵花私信）。一つのツギヤでシーズン中、平均60羽前後捕れた（故友利恵花私信）。それからすると、宮古諸島全体で100,000羽前後のサシバが寒露になると犠牲になったと考えられる。戦前は繁殖地の日本列島の自然環境も良好でサシバの数も順調に増加したのだろう。サシバ飛来のピーク時には、その数があまりにも多くて休息する木が見つからず、そのままイモ畑に舞い降りたという（故友利恵花私信）。畑に出ている女性たちもイモづるを束ね頭に載せ、じっと座り、サシバが頭上のイモづるに舞い降りるとサッと両手を伸ばして足を捕えた。多い時には4～5羽も取った（故友利恵花私信）。その当時は、大変な数のサシバが宮古諸島に飛来したと推測される。

慶長14年（1609）、薩摩の琉球侵攻で始まった人頭税という税金で島の人たちは苦しめられた。島の人たちはサツマイモ、その葉っぱや茎、野草などを海水で炊き空腹を満たしていた。厳しい人頭税が続いた266年間、島民は美味しい肉類を口にすることは出来なかったにちがいない。栄養失調で苦しむ島民は何かには栄養の補給源を見つけなければならなかった。

幸いなことに、秋にサシバが大きな群れでやって来た。そのサシバで島民の栄養失調はいくらか回復したのだろう。宮古諸島では、いつ頃からサシバを大量に捕らえて食料にしていたか、はっきりしないが、この人頭税の頃と関係あるのかもしれない。苦しい食糧難の頃、サシバは島民たちにとって非常に貴重な食物であり、年に一度の労働の疲れをいやす楽しいハンティングでもあったのである。

その昔、サシバをよく捕獲したという古老たちとサシバの話をする、夜が更けるのも知らずに話が弾む。昔はツギヤに入ってもサシバが思うように捕れない日には、皆で車座になり、これまで捕獲したサシバの美男美女（？）コンテストや捕獲数の自慢話、一番おいしく食べられる料理方法について語り合った。会話の中では一番きれいなオトリのサシバ（雄、成鳥、方言名：アカミー）を持っている者と、一番条件の良い場所にツギヤを作った者が皆からうらやましがられたという。

3) タンパク源、換金動物としてのサシバ

一般的な料理方法としては、熱いお湯に入れた後、羽をむしり、内臓を取り出し、ぶつ切りにして雑炊（方言名：タカジュウーシ）やおつゆにした。タカジュウーシは味噌で味付けし、その中にはヨモギ、エンサイ、イモズルの葉っぱ等を入れた。体の割には肉の部分は少なかったが雑炊は美味だったという。寒露（10月）の頃は「タカぬパナスキイ」（寒露の頃の

風邪)といわれ、季節の代わり目で多くの島民が風邪をひいた。サシバはその風邪退治の食べ物として、季節のものとして重宝がられた。つまり、季節の物を食べないと風邪をひくということではほとんどの家の食卓を潤していたのである。鋭い爪は子供たちがつなぎ合わせて指輪にして遊んだ。羽はほうきにして使用した。



写真 12 サシバ捕獲



写真 13 サシバ料理
(1970年代)



写真 14 タカジュージ
(イメージ写真)

(写真 12、13 座喜味英二)

サシバのシーズン中はサシバが捕れても捕れなくても島人が集まってサシバよもやま話に花を咲かす楽しいひと時でもあった。あまり多く捕って家庭で消化しきれない時は、市場に



写真 15 捕獲されたサシバ (伊良部) (1980年代)



写真 16 1961. 10. 13、那覇国際通り
(沖縄タイムス社提供)

売りに出された。沖縄本島にも送られ国際通りや泊港でも米ドルの 50 セント～1 ドルで売買された (沖縄タイムス、1961. 10. 13)。宮古の各家庭では馬小屋近くの物置小屋でサシバを飼

い来客や何かのお祝い事には取り出して料理したという。その当時は、まさに、サシバにとって受難時代であったのである。郷土の歌人であり医者でもあった宮国泰誠氏は、その頃、次のような歌を詠んだ。「昨夜捕りしサシバか紐に結ひきて昼の市場に島びとら売る」

伊良部島、多良間島でも、サシバのよく休息する部落有地の山林の木は入札に付された。入札の済んだ後、自分がツギヤを作る予定の木にはススキ等で、その木の幹を縛り、そのシーズン中の所有権をアピールした。入札の日は毎年決まっています、その日以前に印をつけても部落有地の場合、無効になった。入札で落ちるお金は、部落の敬老会、運動会、正月、祭り等に使用された。

なお、宇野常彦氏は宮古島駐屯記（昭和54年）に、昭和20年、戦後の食糧難の頃、鷹狩をして久々に野生の鷹汁を賞味したことを捕獲方法から料理の仕方まで詳しく書いている。

4) 子どもたちとサシバ

子どもたちは祖父、父、兄たちが捕ってきたサシバの脚をヒモでくくり、その先に、はき古した下駄を付けて飛ばし、飛行距離を競い合った。その当時、子どもたちにはサシバがペットとして与えられていた。子どもたちは、そのペットのサシバを可愛がりエサを与えたり水を飲ませたりして大切にしていた。サシバは人前ではなかなかエサを食べないので魚の切り身やバッタ、ヤモリ等を強制的に与えた。時にはカエル（サキシマヌマガエル）やスズメ等も与えた。またある家庭では羽を切り天井裏に放しネズミ等を捕らえさせたという。



写真17 サシバと遊ぶ子供たち（1960年代）
（写真提供 故ジョージHカー、ハワイ大学）



写真18 子供たちは自分のサシバをとっても大事に可愛がった

5) 古謡の中のサシバ

旧平良市サシバの歌 (1)

たか どおい でんご うわが やーやー んざが
たらまぬ ばいぬかた うぷぎぬ すたんど
やーやー つっふい すっさ つっふい びじゅい
たーかー ぬいぬい (奥平潤、1980、平良市少年少女合唱団)

(タカさん おまえの 家はどこだ 多良間島の南側の 大きな木の下に 家をつくり 巣をつくって座っているよ)

旧平良市 (西里) サシバの歌 (2)

ウヌタカ バガタカ (その鷹はわが鷹) ヤーデンゴ デンゴ (はやし) ウァガヤーヤ ン
ザガ (きみの家はどこか) タラマヌ パイカターヌ (多良間の南方の) ウブキヌ パナ
ンドゥ (大木の梢に) スヤ ツフィ ヤーヤツフィ (巣をつくり家をつくって) ビュウ
ス ビュウス (座っているよ 座っているよ) ターカーヌイヌイ (鷹 ぬいぬい)
(佐渡山正吉、1998、宮古のことわざ)

伊良部島国仲サシバの歌 (3)

- 1 くがつん まいふう たかがま どんま しっつあ しっしど とびまいふう
(旧暦9月に飛来するサシバは 毎年季節を 知って 飛んでくるよ)
- 2 くがつん まいふう たかがま どんま すまぬばん むらぬばんちど ぬくいあむ
ぬ どうたまい すまぬばんちど ぬくらじてい
(旧暦9月に飛来するサシバは 島や村を守るために居残る 私達も島や村を守るために
残って頑張ろう)
- 3 しつぬ といがま どんま むどりっち みいらいすが どうぬ ふっふあんみや
のうちが みいらいんが
(寒露になると サシバは 必ずみられるが 死んだわが子は どうして もどってこな
いのか) (仲宗根玄信・千代、村吉蒲五郎、1979)

伊良部島国仲サシバの歌 (4)

ヤイヤー ヨー くがつん まいふう ンツァ たかがま どんまよー
すまぬゆ ばんていゆ くにぬ ばんてど ぬくすさあ むぬていむよー
どゆたーまい ンツァ すまぬゆ ばんてど くにぬ ばんてい ぬくりや みーでいよ
(ヤイヤー ヨー 九月に 舞い 来る ンツァ 愛すべき小鷹 でさえ 島の 守り手
として 邦の 守り手と して 残るのだそうだ 私たちも ンツァ 島の 守り手と して
て 邦の守り手と して 残るとしよう) (本永清、2012、宮古島市総合博物館紀要第 16 号)

伊良部島佐良浜サシバの歌 (5)

ヤイヤー ユーイー くがつん まい ふう たかがまどんまよー すまぬゆ
ばんてど イラ ぬくりや ういや むぬよーいー どゆたーまい まーん
なつん まい ふう イラ たかがまぬ にゃーんどう すまぬゆー ばんていー
ぬくりや うらでいよー
(ヤイヤー ユーイー 九月に 舞い 来る 愛すべき 小鷹でさえも 島の 守り手と
して イラ 残って いるのだそうだ 私たちも マーん 夏に 舞い 来る イラ
愛すべき 小鷹の ように 島の 守り手と して 残って いようよ) (本永清、2012、
宮古島市総合博物館紀要第 16 号)

宮古島市池間島サシバの歌 (6)

くがつん 舞いうい 鷹がま じゃーんど
すまぬ番てい 根ぬ番ていが ぬくりや うやむぬ
どうーたまいよ すまぬ あるなぎ ぬくりや うらでいよ
あぐたんみよ
(旧暦 9 月の空に 舞っている鷹たちでさえも 島の番として 故郷の番として 残ってい
るそうだ 私たちも 池間島が存在する限り 残って いきましょう 友だちの皆さんよ)
(唄：奥原フミ、三線：嵩原 清、太鼓：伊良波清吉、囃子：佐久元千代、1970～1973 年、
意識：仲地邦博)

多良間島サシバの歌 (7)

たかごー んにごー まいまい ばがむていどー やーにぬ ちゃむ くむいぬ ちゃむ
うわがやーや いだが たらまぬ ぱいばたぬ ゆすきーぬ みーんど すっさ つふい
びーうい びーうい

(たかよ たかのむれよ 舞え 舞え みんなおれのものだ (はやし) おまえの家は どこだ 多良間の 南のほうの すすきの 中に 巣を作り 住んでいるのだ 座っているのだ) (多良間村誌 たらま島、1973)

宮古島市久松地区サシバの歌 (8)

うぬたかー まいの まいの うぬたかーんめー ばがむてい どおい
くぬいのたま やーにぬたま うわがやーや んざが んざが
たらまぬ ぱいかたーど やーどい やーどい

(たかさん いらっしゃい いらっしゃい この群れは私のもの 今年のぶん 来年のぶん おまえの家はどこだ。どこだ。多良間の南の方に住んでいるのだ) (下地正一、2016)

宮古島市久松地区 (9)

くがつん んみゃーます たかがま じ (で) やーんどよよ
すまぬばん むらぬばんていどう ぬくしどう ぴいーすさよーい
ばんたまいまーん みゃーく とうなぎ ゆからでいだらよ

(旧暦9月に飛来するたかの群れはね、島の番人として むらの番人として 何羽か残して 去り立って いくんだね 私たちは 永遠に宮古島に根を下ろして楽しんでいこうね)

(本永英治、2018. 7. 21、宮古毎日)

宮古島市上野野原地区サシバの歌 (10)

たかごーや んみごーや やーでんご
たかい のーい のーい うわがやーや んざが ずみんが あーがらやー
たかい のーい のーい

(砂川智恵、2018)

来間島サシバの歌 (11)

たーぬ たか よーい ていんく うわがやーや んざが んざが たらまぬ にすぬ か
ーた ばいぬ かーた すっさ つっふい びじゅい

(あの 点々と群れをなして見える たかさん おまえの 家はどこだ。どこだ。多良間の西の方、南の方に巣を作り すわっているよ) (仲松義男、国仲富美男、砂川輝夫、2016)

旧城辺町比嘉部落サシバの歌 (12)

かんるぬ たかぬ とびいにゃーん おおびやー がまぬよ とうびいにゃーん
あがすうーみゃーあーよ

(寒露のタカが ゆーゆーと飛んでいるように ハヤブサが力強く飛んでいるように 頑張ろう。同志の皆さん!) (奥平寛、2018)

宮古諸島各地で歌われているサシバの歌は、すべて、伊良部、佐良浜地区で歌われているサシバの歌をベースにしている。

6) 民話の中のサシバ

旧平良市荷川取、下崎、旧下地町来間島、多良間村水納島にはタカ (サシバ) にまつわる以下のような伝説や民話がある。

〈サシバの元祖〉 (荷川取)

「昔々、サシバの元祖が宮古島の上空を飛行している途中に羽を傷めて、舞い降りた所がウリントウマラ (マユモヌーランオバナタ) (旧荷川取のゴルフ場近く) という入江でした。サシバの元祖は羽の傷がひどく、秋風の吹く肌寒い夜に息を引き取ってしまった。サシバの仲間たちは、その霊を慰めるために毎年秋になると宮古島に飛来するといひます」

(宮古高等学校学校 34 期生、仲里、幸地、洲鎌、1981)



写真 19 ウリントウマラ (マユモヌーランオバナタ) (宮古高等学校 34 期生 仲里、幸地、洲鎌、1981)

〈タカとカエル〉（下崎）

下崎には以下のような楽しい民話がある。「昔々、タカとカエルは大の仲良しだった。ある日、ふとしたきっかけでタカとカエルは狩俣の西平安名崎から保良の東平安名崎までかけっこをすることになった。この勝負には酒一升と魚一匹がかかっていた。カエルはそのままで負けるに決まっている。そこで宮古中のカエルたちに協力をお願いした。カエルの作戦というのは出発地から決勝ゴールまでの間に何メートルかおきに仲間のカエルたちを配置し勝負に挑もうというものだった。結局、カエルの知恵でタカは負けてしまった。タカは酒代が無く、三か月間待つてくれるように頼んだ。しかし、三か月たっても酒代は作れません。そのうちに秋も終わり、タカは自分の生まれ故郷に帰ってしまった。それで、宮古のカエルたちは酒代をいつ持ってクルカークルカーと鳴いているという」(故下地恵義、宮古毎日新聞)。

〈タカ伝説の洞窟〉（来間島）

来間島にはタカ（サシバ）伝説をもつ洞窟がある。洞窟の名を「カーカナタ」という。島の北側、切り立つような断崖の上にあった。故砂川金六さん（1993年当時、67歳）に案内されていくと、直径1メートルくらいの縦穴ぽっかり口を開けていた。相当深い。縄ばしごでも用意しない限り、とても降りていけない。4年前（1989年頃）、穴を探検したという砂川さんの話だと、穴はL字型の横穴になっていて、横穴の長さは百メートルに及ぶという。その中ほどにタカが翼を広げた形の岩があり、島の人たちはそれをタカの先祖と呼んでいる。タカの群れはまず、自分たちの先祖を拝むために来間島に飛来し、それから島々に散っていくと伝えられている（中村喬次、1993）

〈鳥塚〉（水納島）

また、宮古島から南西に約60km離れた所にある多良間村水納島にはタカ（サシバ）と人間の心温まる交流を描いた以下のような伝説がある。

「その昔、ある所にユリワカという知勇にたけた男がいました。彼は大変な寝坊助で、寝かせておくと、三日も四日も眠り続ける程でした。ある日、村の若い仲間たちのたくらみで寝ているところを板戸に載せられ海に流されました。三日三晩眠り続けて目覚めた所が水納島の海岸だった。彼の妻は、突然の夫の失踪に大変驚いた。夫の安否を気遣って、これまで大事に飼っていたタカを夫のいる所を探してくれるようにという願いを込めて、放した。タカは南の空へ飛んでいき、ユリワカの漂着している水納島にたどり着いた。ユリワカは見覚えのある、そのタカに涙を流し感激した。自分の指を傷つけ、血で木の葉に名前を書き、タカに括り付けて放した。

ユリワカの妻はタカの知らせで、夫が元気であることを知って大変喜んだ。彼女は麦と酒の入った袋をタカの体にくくりつけ、もう一度放した。しかし、運悪く、途中で台風に巻き込まれ、水納島海岸近くで精根つき果てて死んでしまった。そのことを知ったユリワカは大変嘆き悲しみ、そのタカの亡骸を水納島海岸近くに墓を作って埋めてやった。それ以来、島の人たちも、お墓にお供え物をしているという」(多良間村誌、1973)



写真 20 鳥塚 (多良間村水納島)



写真 21 来間島北斜面

このように宮古においては寒露の頃になると、島のあちこちで、老若男女問わず、日常生活の中で、民話の中で、古謡の中で、俳句、短歌、詩、エッセイ等、文学の世界でも、必ずサシバが出てくる。私たちの郷土宮古には世界のどこの国にもないようなサシバ文化が脈々と息づいているのである。

7) 俳句、短歌、詩、童話、エッセイ、言い伝え、俚諺 (ことわざ) の中のサシバ

<俳句>

宮古ではサシバを詠んだ俳句が多い。その代表的な句が宮古島市のカママ嶺公園に設置されている俳句サークル円虹初代主宰山田弘子氏、二代目主宰山田佳乃氏の句碑である。宮古では山田先生親子の助言で麻姑山俳句サークルが宮古島ジュニア俳句育成会を立ち上げ子供たちの情操教育も押し進めている。



写真 22 山田弘子氏 句碑



写真 23 山田佳乃氏 句碑

2018年10月13日、宮古で初めて日本自然保護協会主催の小中高生を対象にしたサシバ俳句コンテストがあり次の句がそれぞれの賞を受賞した。

サシバ飛ぶ 飛行機雲を 追いかけて (大賞 平良中2年 新城楓澄)

なくなるな サシバとだいじな みゃーくふつ (日本自然保護協会賞 東小2年 西村 来人)

やあサシバ どうどうと空 とんでいけ (三菱地所賞 平良第一小3年 宮里琢夢)

勇ましく 飛んだサシバが 風になり (日本野鳥の会賞 西辺中3年 高良朱)

さしばさん またらいねんも わたってね (宮古野鳥の会賞 鏡原小1年 ながはまりあ)

風物詩 サシバ舞う空 宮古島 (ラッシュジャパン賞 鏡原小6年 友利美月)

その他、宮古毎日新聞に毎月紹介される麻姑山俳句サークルのサシバの句も何点か取り上げた。

わが生の 余白の方へ 鷹の旅 (伊志嶺 亮 麻姑山俳句会宮古島ジュニア俳句育成会会長)

師の文字の 広がる碑面 鷹の舞 (池田 俊男 麻姑山俳句会)

懺悔して この群鷹と 発つべきや (真栄城 いさお 麻姑山俳句会)

鷹の目よ 語れや使者の ことなども (友利 敏子 麻姑山俳句会)

天空の 点となりける サシバかな (岡 恵子 麻小山俳句会)

ひととせは かくも早しか サシバ舞う (友利 昭子 麻姑山俳句会)

点点点 遙か彼方の 点は鷹 (土井 直治 俳誌 「丸虹」平成21年2月号)

鷹つぎつぎ 湧き出る 雲の切れ目より (土井 直治 俳誌 「丸虹」平成21年2月号)

<短 歌>

昨夜(きぞ) 捕りしサシバか 紐に結わひきて
昼の市場に 島びとら売る (宮国泰誠)

黄目(キンミー)・赤目(アカミー)・緑目(タリカスミー)のサシバたち
競い飛ばした 幼き日はるか (伊志嶺節子、歌集ルルドの光、2013)

悠々と サシバの渡り 秋空に
「捨ててしまえ」と 今日も問いくる (伊志嶺節子、歌集ルルドの光、2013)

<詩 集>

サシバの歌(序詩)

サシバよ サシバ
わたしの鳥よ
どこまでも 翔べ
山を越え
空高く
翔べよ 翔べ
世界の空を
こころの鳥よ サシバ
いのちの鳥よ サシバ
海を越え
いつまでも 翔べ
空を越え
とこしえに 舞い (伊良波盛男、サシバ詩集、神の鳥より)



写真24 2016、土井直治

<サシバにまつわる言い伝え・俚諺>

ウプモウ、おおまい（大舞）（寒露の中ごろに渡来するサシバの大きな群れ）

タカぬユスパイ（寒露の頃に降る小雨）

たかぬ ぱなすきい（寒露の頃に子供たちがひく風邪）

かんるぬ ぱなすきい

たかぬ もうちかあ がらさ まいどう もう（鷹が舞えばカラスも舞う）
能力のないものが人の真似をする（佐渡山、1998）

<童話・書籍・歌集・写真集>

代表的な童話にピルバという名前のサシバとタルタという少年の心温まる交流を描いた「サシバ舞う空」（石垣幸代、秋野和子文、秋野亥左牟絵）がある。この童話は2002年に小学館児童出版文化賞を受賞している。また、サシバのピコロを主人公に苦難に満ちた渡りをテーマにした童話「サシバのピコロ」（仲間明典、1999）も子供たちには好んで読まれている。

その他、書籍、歌集、写真集として、「サシバ日和」（謝花勝一、1997、ひるぎ社）、「サシバを追う」（久貝勝盛、2003、みえばし印刷）、「我が人生の航跡」（与座勇吉、2004）、「歌集ルルドの光」（伊志嶺節子、2013）、「サシバ俳句写真集」（土井直治、2019、印刷中）等がある。



写真 25 サシバ関係 童話・書籍・詩集



写真 26 サシバ関係 書籍・童話・歌集

8) なぜ今サシバ保護か

これまで述べてきたようにサシバと関わった長い歴史を持つ宮古ではサシバ密猟をなくするのは大変に難しい面もあった。サシバと関わり合った長い年月の間に「季節の物を(サシバ)を食べないと風邪をひく」という迷信等も加わりサシバ保護思想はあまり浸透しなかった。

しかし、長い地球の歴史と共に逞しく生き抜いてきたサシバが絶滅すると二度と同じ種のサシバは出現しない。サシバが消滅するとサシバを頂点とする食物連鎖も大きく崩れる。

自然界はすべて食う食われるの関係(食物連鎖)で成り立っている。自然界の中で、もしどちらか一方の生物種が何らかの原因で異常に増加したり、減少したりすると、それに伴い、その生物種に依存している生物種が大きな影響を受け、最終的には、その影響が人間にも及ぶのである。

シジュウカラという小鳥は一年間にシャクトリムシの仲間を 12 万 5 千匹以上も捕るという(日本鳥類保護連盟、1980)。中国では 1955 年当時、大躍進政策の一環として実施された「四害追放運動」でネズミ、ハエ、カと共にスズメを撲滅させるという計画が実施された。大規模な人海戦術でスズメは年に 11 億羽以上も捕獲されたという。しかし、1960 年にはスズメは対象から外された。その理由として「スズメを駆除したことでサクランボを含む農作物の害虫が増え全国的に凶作になった」とも言われている(ネット Wikipedia)。

戦後、宮古島でも大野山林を伐採してイモを植えたら、エビガラスズメやナカジロシタバという蛾の幼虫が異常発生し食料として植えたイモがほぼ全滅状態にさせられた(高良講演、1991)。これは山林を無計画に伐採したために、そこを生活の場にしていた野鳥たちが別の場所へ移動し、これまで、その野鳥たちによって捕食され抑えられていた幼虫が天敵である野鳥がいなくなったために異常繁殖したという一番身近な例である(図 4)。

図 4 を基に野鳥と環境について考えてみよう。ある環境が土地改良、海岸の埋め立て、リゾートホテル建設、森林荒廃等で大きく変化すると、その地域での食べ物の量や質が落ちる。そこで生活していた鳥獣も移動する。その結果、今まで抑えられていた害虫が増え、森林はますます荒廃する。周辺の農作物にも影響を及ぼす。

農家は農薬を使用し害虫駆除をする。そのうちに農薬抵抗性の昆虫が出現するようになる。その時になって関係者は害虫の異常発生だと騒ぐ。過度の密猟も同様な結果をもたらす。逆に植林を積極的に行うと、鳥獣が戻り、害虫が抑制され、緑が増える。どうして緑が増えるのだろうか。植物の果実を食する小鳥類は未成熟の果実は食べない。必ず完熟した果実を食べる。植物の種子は一度小鳥類の腸の中を通らないと発芽しないものが多い。小鳥類が排泄物と一緒にまき散らした種子は広範囲にわたって発芽するようになる。こうして緑は鳥類

と関わりながら増えていくのである。なお、ほとんどの山野の鳥類は繁殖期には虫類を食して害虫発生をコントロールし、非繁殖期には果実類を食し緑の拡大に貢献している。

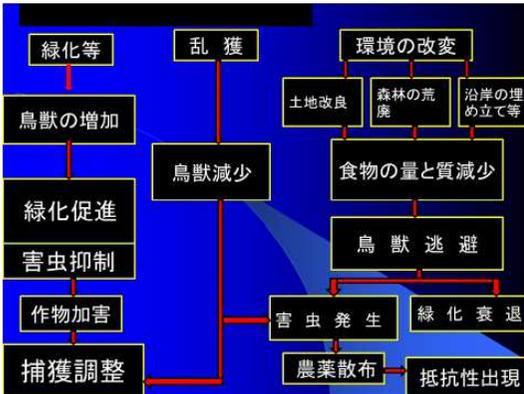


図4 環境と野鳥（高良講演、改変、1991）

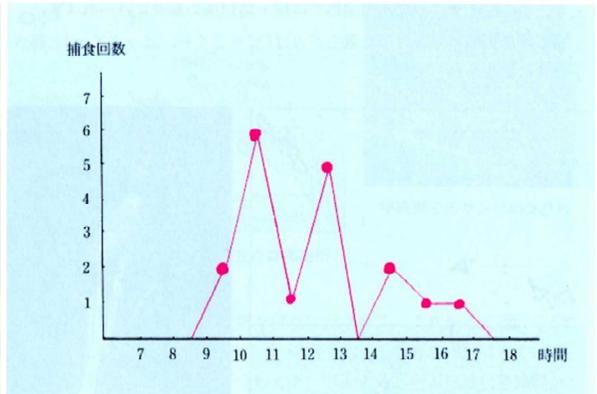


図5 サシバ1日当りのバツタ類捕食回数（キビ畑周辺）（1988.1.22、伊良部）

宮古諸島で越冬するサシバはタイワンツチイナゴ、タイワンハネナガイナゴ、ネズミ等をふんだんに捕食し、農作物を外敵から守ってくれる（図5）。

地球は私達人間だけのものではない。自然界の動植物と人間とが仲良く共存できるような社会、そういう社会こそもっとも望ましい社会である。

多くの種類の野鳥が生活している所は私たち人間にとっても住み良い環境である。少しでも環境が汚されたり破壊されたりすると鳥はすむ場所を変える。鳥類は環境汚染や環境破壊のバロメーターである。

アホウドリは150年ほど前には北太平洋の島々に分布していた。個体数は少なくとも数十万羽いたと考えられているが、現在総個体数は4,500羽と推定されている。アホウドリは羽毛採集のために乱獲され絶滅寸前までいった。しかし関係者の努力によって、少しずつ回復してきている（山階鳥類研究所、2017）。19世紀末、シラサギ類の美しさにあやかりたいと願う欧米の貴婦人たちが、その羽を飾りとして使うことを全世界に流行らせた。シラサギ類はあっという間に激減した。20世紀になって、世界のあちこちから非難の声が高まり、反省が生まれシラサギ類は救われた。

寒露になると必ずサシバは大群で渡来する。長い旅の疲れをいやすために宮古の島々、特に伊良部島にやってくる。数百年、あるいは数千年もの昔から、延々と今日まで続いている。この秋のタカ渡りのドラマがこれから先も絶えることがないように見守りたいものである。毎年、10月いっぱいサシバ保護月間である。

9) サシバ保護の歴史

昔からサシバの集団渡来地として知られる宮古諸島では 1970 年代前半まで島民は宮古独特のサシバ捕獲小屋（方言名：ツギヤ、スギヤ）を造って大量にサシバを捕獲し、タンパク源にしていた。この現状に心を痛め 1974 年に宮古野鳥の会を立ちあげ学校・地域・行政とタイアップしてサシバ保護活動に取り組み約 35 年もの長い年月を経てサシバ密猟防止に成功した。なお、かつてサシバ密猟は悪名高い日本の三大密猟の一つとされていた。

1) 1974 年～1987 年：宮古諸島のあちこちでサシバ密猟が見られる中、根気強く、粘り強く、行政の力も借りてパトロールや中学校での講演会活動を行った。それと並行して勤務先の伊良部高校ではサシバを教材にした生物の授業もおこなった。特に密猟の多い下地地区、伊良部地区を中心に、自分の授業のない時間帯や土・日・祝祭日等を利用し昼間は学校等での講演会、夜は 7 時から 9 時頃までハンドマイクを持って「サシバはネズミやバツタ類を駆除して私たち人間生活に大きく貢献している。また、世界的な保護鳥にも指定されている。皆の手で暖かく保護しましょう」と呼び掛けた。1985 年ごろには下地地区での密猟はなくなった。サシバが一番多く飛来する伊良部地区でもサシバ保護に関する認識が学校を中心に少しずつ広がっていった。また年に四回程、市民を対象に野鳥観察会も開催し愛鳥思想を浸透させた。

2) 1988 年～1996 年：地道な保護活動をしてきたにもかかわらず伊良部地区では毎年のようにサシバ捕獲小屋（ツギヤ）が見つかり密猟者が横行した。そのうちに地元の伊良部中学校が県の環境教育モデル校を引き受けサシバ保護問題に取り組んだ。私はアドバイザーとして講演会を持ったりサシバ飛来数カウント方法等の指導をした。それを機に生徒会も地域の母親の会を巻き込み地域ぐるみで保護運動を展開した。1970 年代に中学生だった子供たちも社会人になりサシバ保護運動に協力するようになった。1993 年、伊良部町教育委員会が県とタイアップ「第一回サシバはともだちフォーラム」を開催した。

1994 年にはサシバの集団通過地点で知られる愛知県浦都市立西浦小学校からの参加を得て「サシバは友だちサミット（沖縄県、伊良部町、サシバは友だち推進会議共催）」が開かれた。伊良部高等学校でもサシバのシーズンに合わせてサシバ俳句展がスタートした。

3) 1997 年～2010 年：2000 年頃までは少数の密猟者が摘発されたりしたが、これまでの保護活動は見事に功を奏した。2009 年頃にはサシバ密猟が完全になくなったのである。この取り組みは県、伊良部町、宮古野鳥の会、警察等の関係団体が一体となって推進した全国的にも世界的にも高い評価を受ける保護活動の成功例と言えよう。この保護活動を通して痛切に感じたのは子供たち、特に、低学年の子供たちへの環境教育がいかに大切かということであ

る。環境教育をしっかりと受けた子供たちが大人になってくると確実に大きな変化が起こる。
4) 2011年～2015年：毎年10月には県、宮古野鳥の会と一緒にサシバの飛来数調査をしている。これは日本で繁殖するサシバの個体数変動を見るうえで極めて重要な調査であ



写真 27 サシバ保護活動
(1980年代、伊良部)



写真 28 サシバ保護集会
(2000年代、伊良部中学校)

る。シーズン中、地元の伊良部中学校、伊良部高等学校の科学クラブや生物クラブもこの調査に精力的に参加した。生徒たちは、ますます、「島の宝物であるサシバ」を通して自分たちの郷土、伊良部島に誇りを持つようになっていく。

10) サシバの未来

2005年10月1日、宮古は5市町村が合併して宮古島市になった。これまで伊良部町の鳥だったサシバも宮古島市の鳥になった。

2017年10月3日、日本で一番高密度でサシバが繁殖する栃木県市貝町（いちかいまち）と世界的に知られるサシバの中継地点である宮古島市はサシバを通じた交流都市協定を結んだ。それを記念して2019年5月には市貝町で第一回の国際サシバサミット、2020年10月には第二回の国際サシバサミット、2021年にはフィリピン、2022年には台湾でそれぞれ開催される予定である。こうして見るといろいろあったサシバの未来は明るいものになりつつある。

11) サシバ方言名

宮古全域でサシバの方言名はタカであるが島尻地区だけはタカーと呼ぶ。最初に来るサシバ（パツダカ、久松）、久松ではサシバ捕りに行ってサシバが捕れなかった人を「タカーン フスマラ」（うんこをひっかけられる人）ともいう。オトリのサシバ（ブーズダカ：来間島、伊良部島、ブーギイダカ：平良地区）、越冬サシバは地域によって呼び方が異なる。ウテイダカ（落ちダカ：平良地区、城辺新城）、スマバンダカ（島を守るタカ：伊良部佐良浜地区、

池間、狩俣地区)、ユラリダカ (迷子になったタカ:伊良部佐和田、城辺地区、大神島、島尻)、ウチマーイダカ (城辺比嘉、落ち着きのない人を称してウチマーイダカともいう)、ヤママーリダカ (山を回るタカ:来間島)、ビイヴィダカ (上野地区)、トマイダカ (とどまって泊まるタカ:下地地区与那覇)

まとめ

- ①1973年から取り組んだサシバ保護活動は地域、行政、学校、宮古野鳥の会、その他、多くの関係機関の後押しで2009年に終止符を打った。
- ②宮古にはサシバと関わった長い年月の間に構築されたサシバ文化がある。
- ③サシバと関わりの深い多良間島、伊良部、佐良浜、荷川取、久松、来間、与那覇、川満地区には独特の捕獲方法 (ツギヤ、スギヤ) がある。
- ④来間島の捕獲方法には以下の3つがある。スギヤ (昼間用)、ンドゥギー (夜間用)、イジャズ (単独でワナと懐中電灯を使用)。
- ⑤サシバはタンパク源としてタカジュージ (雑炊) にされ食卓を潤した。
- ⑥1960年代、換金動物として那覇の泊港や国際通りで1羽米ドルの50セント~1ドル (当時のレートで150~300円) で売買された。
- ⑦サシバと関わりの強い伊良部・佐良浜では自然発生的に即興的にサシバの歌が歌われた。
- ⑧宮古各地に歌い継がれているサシバの古謡はすべて伊良部、佐良浜の古謡を基にできたと考えられる。
- ⑨今回の調査でサシバの古謡を12曲、民話も4編採集した。
- ⑩サシバの方言名は宮古全域でタカ (島尻地区だけはタカー) であるが越冬サシバは地域によって異なる。
- ⑪サシバをモチーフにした俳句、短歌、詩、童話等も多くある。
- ⑫2005年10月1日の市町村合併でサシバは宮古島市の市鳥となった。
- ⑬2017年10月3日、日本で一番繁殖密度の高い栃木県市貝町と宮古島市がサシバを通じた交流都市協定を結んだ。
- ⑭交流都市協定締結を記念して2019年5月には栃木県市貝町で、2020年10月には宮古島市で、2021年にはフィリピンで、2022年には台湾でそれぞれ国際サシバサミットが開催されることになっている。

謝 辞

この論文作成にあたり聞き取り調査に協力いただいた宮古島各地域自治会の皆様。スギヤ

のスケッチを提供していただいた来間島の国仲富美男氏、下地地区与那覇の幸地昇良氏、楽しい童話「サシバのピコロ」を贈呈していただいた著者の仲間明典氏、貴重な写真を提供いただいた座喜味英二氏、宮古島駐屯記（昭和 54 年）の資料を提供していただいた親泊宗二氏、細かい画像処理をしていただいた市史編さん室の佐藤宣子氏、英文チェックをしていただいた宮古高等学校元 ALT, Victoria Whitlock 先生、1950～1960 年当時の写真を提供いただいた故ジョージ H カー先生、沖縄タイムス社、琉球新報社の皆様方に衷心より感謝の意を表します。なお、この論文の一部は宮古島市史編さん室、トヨタ財団の支援によるものである。

参考文献

- ①徐葆光、1721、中山伝信録
- ②多良間村、1973、多良間村誌 たらま島
- ③岩崎卓爾、1974、石垣島気候編
- ④宇野常彦、1979、宮古島駐屯地記（ガリ版刷り）
- ⑤日本鳥類保護連盟、1980、野鳥保護のしおり
- ⑥松井健、1989、琉球のニュー・エスノグラフィー、人文書院
- ⑦伊良部町教育委員会、1990、いらぶの自然（動物編）、秀報社
- ⑧中村喬次、1993. 10. 31、琉球新報
- ⑨高良鉄夫講演、1991
- ⑩謝花勝一、1997、サシバ日和、精印堂印刷
- ⑪渡山正吉、1998、沖縄・宮古のことわざ、ひるぎ社
- ⑫仲間明典、1999、サシバのピコロ、バーズ・クリエーション
- ⑬伊良波盛男、2000、サシバの詩集、神の鳥、富士リプロ（株）
- ⑭石垣幸代、秋野和子、秋野亥左牟、2001、サシバ舞う空、福音館書店
- ⑮久貝勝盛、2003、サシバを追う、みえばし印刷
- ⑯与座勇吉、2004、歌集 我が人生の航跡
- ⑰伊志嶺節子、2013、歌集 ハルドの光、ながらみ書房
- ⑱三上修、2015、青森県青森市におけるサシバの 2013 年、2014 年の繁殖について、Strix Vol. 31, pp. 135-145
- ⑲山階鳥類研究所、2017、アホウドリ復活への展望
- ⑳土井直治、2019、サシバ俳句写真集（印刷中）

